

## 第 24 回連続講演会

### 地域がキャンパス～2008 年度学生企画による環境学習活動発表会～

#### 「NPO 法人子ども環境活動支援協会（LEAF）の取組」

<講師プロフィール>

小川 雅由（おがわ まさよし）

子ども環境活動支援協会 LEAF 事務局長

1953 年生まれ。1972 年西宮市役所入所。1992 年「2001 年・地球ウォッチングクラブ・にしのみや(EWC)」、1998 年「子ども環境活動支援協会（LEAF）」などの発足に携わる。1993 年日本青年会議所主催「TOYP 大賞」の環境庁長官賞を受賞。この他に、日中韓環境教育専門家ワークショップ日本代表メンバー（環境省主催）、環境省「環の国暮らし会議」地域の取り組み分科会メンバーを務めた。2006 年 3 月西宮市退職後、2007 年 4 月より LEAF 事務局長兼理事に就任。



#### ■LEAF のはじめ

この協会は略して LEAF と言いますが、その活動についてご紹介したいと思います。私たちの協会は 1998 年に西宮市役所が呼びかけて、市民と、事業者と、行政のパートナーシップで子どもの環境教育を支援しようと言うことで設立した団体です。平成 14 年に NPO 法人の認証を取りまして今現在に至っております。当時はまだ、NPO というものがどのような性格のものかわからない、また社会でもあまり認められていなかったということがありました。私たちは、NPO 法ができたり、ボランティアというものが日本社会に広がったのは、1995 年の阪神淡路大震災が大きな原因だったと理解しております。西宮市というのは神戸市の隣にある街です。西宮市もすごく大きな被害がありまして、その当時 1100 名の方が亡くなりましたし、家屋の倒壊も約三分の一の家屋が、全壊、半壊をしたということで、非常に大きな打撃を受けた街のひとつです。その当時から復興をずっとやってきていますが、いまだに当時の借金がまだ返せないような状態です。阪神淡路大震災を受けて、社会全体としてはボランティアや NPO などいろいろなきっかけができました。私たちの地域の中でもやはり大震災を経て人と人とのつながりや、人と自然のつながりといったものをいろいろ考えるきっかけがありました。

この協会は西宮市が立ち上げたのですが、決して西宮市の下部機関のようなものではありません。市はお金も人も出しませんが、立ち上がって自立するまでの間事務所を貸してくれて、運営はすべて主体的、自主的に行うことができました。基本的には、当時、市民と行政というのはどちらかというとすぐに対立構造となってしまうような嫌いもありましたし、企業と市民の中でも環境問題をめぐっては、「企業は悪いことするん違うか？」というような意識があったり、なかなか市民と行政、市民と企業、また企業と行政がうまく連携できないということもありました。私たちは行政の中でいろいろ仕事をしているとついつい市民目線を忘れて行政の思い込みで仕事をしてしまう嫌いもあります。そういうことに歯止めをかけて、市民の目線で行政をするにはどうしたらいいか、ということも私たちの悩む問題としてありました。ただ、ずいぶん時がたってこの阪神淡

路大震災を超えた時ぐらいから、やはり市民と事業者と行政というのは対立軸ではなくて、対話をしていく、協調していく、共にお互いの利点を生かして街づくりをしていくという、そういう「つながり」を意識した事業展開を考えていくようになりました。

この協会は、そういったことから、地域の中で市民と事業者と行政とをつないでいく役割を担おうということで運営していて、理事の中にも企業の方や行政の方や市民の方、いろいろな団体に入っています。また、2年前から小澤紀美子さんに代表理事をして頂いて運営している団体です。だいたい、個人会員、企業会員等ありますが、特徴的なのは企業会員が約 70 社入っています。企業と連携した環境教育とか、地域ベースの環境養育を柱に掲げて進めています。1998年に作ったときに、「環境教育」と同時に「持続可能性教育」ということを柱の中に入れて持続可能な社会に向けていったい私たちは何をすべきかということを考えて作った団体です。

西宮市は山があり川があり海があり、ということで自然環境に恵まれていて、自然をベースにした環境学習のフィールドはたくさんあります。これをいかに市民の方に上手く活用して頂くのか、子どもの教育の中にこれを活かしていくのが大きな課題でもあり、こういった地域の特性を使った環境教育事業を、私がちょうど係員としてここに配属されてから、約 20 年間かけていろいろなプログラムや施設整備をしてきました。今はもう山の拠点、川の拠点、海の拠点、もう三つ拠点ができまして、これをネットワークしながら、いろんな自然体験をベースにした環境教育を推進しております。

いま私たちがいるのは、赤丸で書いてあるところですが、これはもともと COOP 神戸さんが店舗をやっていたところなのです。右側の写真は西宮の淡水魚を飼っているところです。約 30 種類くらいいます。ここはもともと COOP のフードコートやっていたところで、カウンターがあったところに水槽を置きました。カウンターの上をふたをして、水族館にリニューアルさせて、そこに私たちの事務所や、西宮市の環境学習のサポートセンターを置いて、市民の環境学習の拠点にしています。総工費約 180 万円で全てができました。もともと、震災の前までは使っていたのですが、震災の後使われずに倉庫になっていたところを改修しました。フードコートというところは給排水の両方が整ってまして、水族館を作るにはちょうど良かったのです。こういうアイデアを使いながら、安く市民の学習支援をしています。この間いろいろと賞を頂きました。行政としての環境政策であったり、子どもの環境教育に関することであったり、企業と NPO の連携ということであったり、あと、森林保全の取り組みに対する賞をいただいたり、ということで、LEAF が四本柱にしているいろいろな活動のジャンルで、10 年間かけて賞を頂くということができた時期です。

## ■NPO とは

みなさんはこれから学校の先生になられたり行政にすすまれたりという方が多いと思うのですが、NPO とか NGO とかっていう言葉を聞かれて、頭の中で整理ができていますか？少しだけ紹介しておきます。NPO というのは、非営利の組織です。ノンプロフィットの組織ということで NPO です。NGO は非政府です。非政府なので政府関係者は入らないということですから、NPO は非営利なので行政も入ってもいいし、企業も入ってもいいし、個人も入ってもいいのですが、「営利を目的としない」というところがすごく誤解を生んでいる部分があります。一般の市民方とか行政の方は NPO というのはボランティアの組織と思っておられるのです。ところが、これは、非営利という、営利にあらず、利益を求めないとは言っているのですが、この利益とは何かというと、たとえば株式会社がその対極にあり、これは利益を求めています。たくさん儲けて、たくさんお金を生み出す。生み出したお金どうするかというと、それを役員や株主に返していくのです。NPO と株式会社の違うのは、この余ったお金を、株主や役員に配分するかないかなのです。NPO は配分したらだめなのです。余ったお金は次の年の事業費に回す。それさえすれば、利益をあげるのは問題ないのです。利益の中から職員に給料払う、これは当然の事なのです。ところが今、一般の行政も含めて、NPO と契約をした方が安いからや、アルバイト賃金で雇えるからというところで契約をしようという意識があったりとか、市民

の方の中にも、NPOがお金を稼いでどうするのか、そこで働いている方の賃金保障などはあまり考えてもらえないという実状があります。私たちのNPOは、できるだけそこで働く人の現場を作りたい。ですから、大学や高校を出て、このNPOで社会のために働く、そして収入も得る、つまり食べていけるというわけです。そういう職場を目指して今やっております。

全国で見ても、NPOの数はすごく増えているのです。全国で35000、東京が1位で5900です。兵庫県は6位で1290のNPOが認定されています。西宮市も県内では二位です。104の団体があります。ここには福祉や街づくりや教育や環境などいろいろありますが、大体全国的に見て同じような割合だと思のですが、環境保全は21%くらいです。一番多いのは福祉のNPOが多いです。これは11年前に介護保険のことを想定してNPO法ができたので、国からお金がたくさん動きました。その受け皿としてNPO法人がたくさんできたというのがあります。環境はなかなかお金が下りないので、団体の数も少ないのかもしれませんが、NPOの中には、大学のサークルの延長や、地域の研究会のようなものの延長でできているNPOもあれば、私たちのように、職場として運用していくような団体もあります。まだまだNPOと一言で言ってもいろんなパターンがあるというのが現状です。

### ■LEAFの活動「システム」

ここからちょっと西宮市のこのLEAFの活動の紹介をします。一番メインになっているのは、この地域に根ざした持続可能な社会ということ想定して環境教育をどう進めていくのかということがあります。西宮市をホームグラウンドにして、ここでいろいろなシステム開発を行っております。

西宮市の特徴がどこにあるかというところ、「システムを組んだ」というところにあります。今までの環境教育というのは、どちらかというと副読本を作ったり環境教育のプログラムを開発したり、あとは施設を作ったり、フィールド作りです。そういった個別の分野で環境教育を進めていました。これは主に行政が中心になって進めてやっていました。市民団体の中では、自然観察会を作ったりとか、資源回収のグループを作ったりして、個別の活動もあります。地域社会全体を変えていくためには何が必要かというところ、地域を全部動かさないといけないのです。市民も企業も行政も、全部動かさないといけない。そういう地域社会全体を動かしていくために必要なものは何かというところ、システムが要ります。そのシステム開発を軸に置きながらいろいろな学びの場を作ったり、いろいろな社会をつないでいったり、いろいろな人を支援する場づくりをしています。こういったグラウンドデザインがきちんとできているかできていないかで、その地域の環境教育が市民の生活の中に根付いたり、それから社会を変えていく、地域を変えていく原動力になるかならないか、こういったことを決定づけていきます。いま日本の環境教育ほぼすべてのところでシステムという概念がありません。ですから例えば役所の担当者が変わったり、地域の方の活動がちょっと弱くなったりすると、そのままスッと環境教育のレベルが切れていくのです。そういったところが多くあります。そういったところを西宮ではケアしようということでこんな活動をやっております。

### ■LEAFの活動「自然環境体験の推進」

二つ目は、「自然環境体験の推進」です。自然豊かな西宮で子ども達から大人までの環境教育を推進する時に一番大事なポイントは、「自然との関わり合いを意識できる人間になっているかどうか」というふうにあります。そういう観点で山や川や海でいろいろな自然体験を小さい頃からできるだけたくさん積み上げていく、その中で自分が人間という存在であり、また、人間が他の生物と共生している社会ということ意識できるかどうか、ここに環境問題を次のステージに上げていく、自分自身の問題としていろいろな問題に取り組んでいく人間の基盤ができていくのではないかとこのように思っています。こういう自然体験活動を支援するための施設運営をやったり、また里地里山というエリアで森を守ったり、農業守ったりする、そういう活動も今少しづつ手がけていっております。特に、市民の方々や企業の方を巻き込んで、そして一緒になって地域の

必要な自然を守っていくというところが必要になります。今までであれば、行政が先頭切って、役所の税金を使って森を守る、そういうことはあったのですが、役所はお金を出しても、人間が動いてくれるというわけではありません。人間はやっぱり市民が、自分達のエリアを守るという意識でついてこないといけません。なかなか実際に森を守り、田畑を守るといことは難しいのです。そういう意味で市民参画ということをしていろいろなジャンルで組み込んで事業しています。

また、農地を今千坪借りて運営しています。これは、農家だけが農地を守れるのかということ、なかなかそういう時代ではなくなってきました。後継ぎがないとか、もう年を取って運営できないとか、けれども若い人の中に農業やろうという人がなかなかいないわけです。けれども、一般の市民の中には食べ物のことを考えたり、それから食料自給率のことを考えたり、健康のことを考えたり、農業に関心を持っている人はいますが、なかなか学ぶ場がありません。ということで今、ハウス食品や伊藤ハム、廃棄物処理会社とか生協さんとかと一緒に、農地の中で家族が学んだり、シニアの人が農業体験したりするような塾を運営しています。市民の農業体験の支援とか、食農体験のイベントを企業の主催でやっていただくとか、いろいろな方法で「農地」というものをもう一度見直す事業展開も行っています。このポイントは、企業をいかに巻き込むかということにあります。また、企業主催でイベントをやって、市民の方に農地に触れていただく。この農地を農地として守るだけではなくて、裏にある山の資源、森林資源と農地をどうつないで行くのかという資源循環をここでいろいろ提案したりしています。あと子ども料理塾というのを兵庫県の事業で受けてやっています。こんな形で、NPOとして私たちは食べていくということが大事なのです。仕事です。職員に給料払わないといけないわけですから、しっかりとお金を生み出して、職員の人件費が出る仕事を組み込んで今いろいろな事業を展開しているということです。

## ■LEAFの活動「企業会員との連携」

私たちの協会の柱としては、企業会員と連携して事業する。企業が70社ほど入ってくれていますから、その70社の企業の力をどういうふうに社会とつなげていくのか、ということが大きな柱です。一つ目は、例えば企業会員と一緒に環境学習のプログラム作ったりとか、キリンビールさんの工場を使った環境教育をやったり、ハウス食品さんや伊藤ハムさんと農業の事業に取り組んだり、様々な事業連携を進めています。これは私たちの協会が立ち上がった1998年からずっと積み上げてきて、約10年かかってここまでやってきたわけです。最初に着目したのは企業の持っている環境教育に関する資源です。企業というのは単に営利を目的とするのではなくて経済活動を支えていますから、いろいろと環境とつながるツールを持っています。知識も持っています。人も持っています。そういうものを企業の中だけの環境活動で終わらせずに、子どもの環境教育であったり、地域を守る環境保全の活動であったり、そういうものをつないで行くジョイント役としていろいろな取り組みをしてきました。最近では、環境学習をキーに、学校を支援するだけではなくて、環境保全活動に企業が取り組んでくれるところまで進めてくることができています。たとえばこのリサイクル関係の企業では先生の研修を行っています。小学生が直接体験をするということで、布のリサイクル、紙のリサイクル、ビンのリサイクル、こういったところが先生や子どもの学びの場になっております。

衣、食、住、エネルギー、ビンと文具という6つの分科会を作りまして、企業が大体5、6社入って環境教育のプログラムを6年前に作りまして、小学校や中学校や高校の授業支援も継続的にやってきております。この時に大事にしていたのが、食べ物なら食べ物の循環です。お米を作る、そのお米を使って何か商品を作る、それを販売する、消費者として家族が買う、食べたあと、何か残れば廃棄する。この資源の循環を、衣類、食べもの、住居、エネルギー、ビン、文具、全て循環ということをキーワードにプログラムを組んで子ども達が消費者として自分はどう関わったらいいかということを考えてもらう。企業の人達が全部プログラムを組んで、学校で実践してくれています。大体このプロジェクトに今30社入っています。「服の一生」とか、「食は命の輝き」とか、この企業は、全部循環に関連するすべてのプロセスの企業が入っております。西宮は酒の街です

から酒にまつわるということはビンにまつわる企業がたくさんあります。そういう点で、ビンとお酒という地域の地場産業をテーマにこの循環という構造を考えていくような仕掛けもしております。

すごく大事にした考え方なのですが、一つは企業の人というのはある意味一線の働き手です。ですから、学校の先生は教科書からいろいろな情報をつかんで子ども達に教えますが、企業の方は実際にその仕事をしているわけです。それは農家の方であれ、商品を製造するところであれ、その一線の人達の話というのは、言ってみたら最先端の話です。そういう先端の話など本物から学ぶということが企業の人達を入れることによって実現することができます。子ども達の生活と、実際の学ぶ学習と、社会の仕組みというものをつないでいくことができます。

もう一つは、子ども達が人生の中で自分の人生設計をするタイミングは小学校の高学年であったり、中学校であったり、高校であったりします。その時に、自分が今まで出会った大人のイメージが子ども達の将来を結構決定づけていきます。価値観形成にそれがつながるのです。そうやって考えていくと、もしかすると、大学を出てそのまま教員になられた方々が出会った職業というのは学校の先生しかいないかもしれません。もしかしたらですが、アルバイトへ行って出会う人はあるかもしれませんが、社会を支えている産業のいろいろな骨格を担っている人達の、職業や、そこで働いている価値観などというものと出会って、子ども達にいろいろな社会の経験を披露できるかという、どうしても学校の先生になっていく人達のプロセスは、教員という世界観を持った人達との付き合いでずっと走ってしまう可能性があります。そうすると、子ども達はどうしたらいいのかと言えば、社会を支えているいろいろな分野の企業の人達を通じて、大人の生き方、社会の仕組みを学んでもらう。そういうことから、自分に向けた職業選択や生き方を考えてもらうのです。

20世紀の産業っていうのは強欲な資本主義と誰かが言っていましたが、人間は人権も環境も無視して営利を求めました。その結果としていろいろな問題が発生しました。これからの21世紀はそれではだめだと言われていています。子ども達に今までやってきたキャリア教育というのは、生き方教育ですが、いい大学に入って、いいところに就職して、お金持ちになって幸せになる。そういうプロセスを大人も描いていたし、子どもも描きました。ところが、仕事内容から見ると、環境破壊した仕事になるわけです。人権侵害をしているような仕事もあるわけです。ところが今の価値観は環境破壊をしたり、人権を破壊するような仕事に価値を見出すかと言えば、そうではありません。本当に環境を守る仕事は何なのか、人権をきちんと守って仕事しているのか、そういう新しい価値観に基づいた働き方、生き方、価値観というのが必要になってきています。そういうことを子ども達にこういう中で学んでもらいたい、ということが大きなポイントでありました。

そういうことを実現するために企業の人達に関わってもらうわけですが、企業の人達が一方的に何か子ども達に情報提供するのではなくて、逆に企業の人達が、普段付き合わない企業群の人達と横断的にこのプログラムを組んで、相談をして、実際授業をするわけですから、そこで自分達がもう一度自分の仕事を練り直さないといけません。子どもの言葉に変えて話さないといけません。このことは企業の人達にとってもすごく大きな学びの場になると思います。子どもも企業も双方向に学び合うということが可能になって、今現在も企業の人はやめようとは言いません。そういう企業の社員研修にもつながるような要素としてこのようなコラボレーションが生まれています。

## ■LEAFの活動「世界とのつながり」

子どもが大きくなった時には国際社会へ出ていきますから、日本でやっている環境教育、環境活動、リサイクル工作などが世界で通用するのかが求められます。そういったことも認識できるような子どもとして成長しないといけないです。国連で子どもの環境活動の発表を聞いて「日本の発表は？」と言われた時に、贅沢から生まれたような環境教育を見せても途上国の子ども達は納得しません。そういうことではなく、同時代に起こっている世界に対する認識を持ったような環境教育はどのようにできるかといったことも、これから求められてくるかと思い、子どもの環境教育をつなぐためのHPを作って運営しています。

今現在、西宮市で行ってきた、持続可能な街づくりに向けたいろいろな環境学習を通じた活動の取り組みが、海外の政府の人達や NGO の人達の、学びの場に今使って頂けるようになってきました。留学生のセミナーや、マレーシアの青年の人達を対象にした研修や、チリの場合は政府の環境教育事業のモデルを全部西宮で作っています。大洋州、フィジー、サモア、トンガという国々のゴミ問題、環境教育、ESD の問題、こういったことを考えていく研修も西宮でやっています。なぜそれを西宮でやるのかというと、環境学習を通じた持続可能な街づくりということをやっているというのはあるのですが、今までの日本でやっている海外研修というのは、日本の先進事例をつまみ食いであちこち見ていくものでした。そうすると、確かにいろいろな良い事例はわかるのですが、一つの街の中で最終的に地域づくりとして落としていこうとした時に、良い面、悪い面、強い面、弱い面、そういったことをトータルに学んで、トータルに組み込んでいく、組み立てていくという発想がなかなか生まれません。そういったことでは母国へ帰っても運用できないのではないかということで、西宮で良い面、悪い面全部見てもらって、その上で自分達の学びの整理をして頂くという、そういった新しい国際研修のシステムを今作っています。

### ■LEAF の活動「環境学習」

環境立国戦略の中で大きな危機を三つ挙げています。それに合わせた社会づくりが、西宮だけではなくて、日本中で求められています。その中で、子ども達にいろいろな話をする時に、温暖化の問題も言葉ではいつもわからないので映像を見せて、「これ、夜の地球で電気がついているところが映っているんだよ。」「ではどこに電気ついているかな?」、見たらわかりますよね。これが温暖化の原因です。では私たちの国はどうでしょうか。夜でも煌々と日本列島全部電気がついている。こういう社会を変えないとやはり温暖化防止はできません。

あと、こういう海の現状です。海に寄せられるごみ。このゴミ、ではどのようなゴミがあるのか、これはほとんどプラスチックのゴミです。鳥の内臓の中にたまっているレジンベルトというプラスチックの原材料です。アシカの首にまわりついた魚網もこれはプラスチックでできています。切れないからどんどん餌を食べて大きくなっていつか最後切れてしまうわけです。傷ができ、そこから菌が入って死んでいってしまうのです。人間が作った安くて便利なものが野生生物の命を奪っているのです。これはウミガメが食べているビニール袋です。こういう人間にとっての便利さや経済性という概念で作ったものがなぜ野生生物の命を奪っていくのか、これは環境教育の原点だと僕は思っています。

今、特に海洋の生物に対する影響がたくさん出ていますけれども、この問題点は何かということ、この地球上の命の循環の問題なのです。この地球上の命が生まれる原因は太陽があって、植物があって、それを食べる小さな昆虫がいて、だんだん肉食のものへと、というふうに食物連鎖がずっとつながっています。最後にダンゴムシが死体や枯葉を土に帰してくれます。これで地球上の命がずっとまわっているわけです。この食べて食べられてという食物連鎖が地球上の生物の生き方、自然の摂理であるならば、この摂理を超えるものは環境を破壊するものだという事です。先ほどのビニール袋が何で野生生物を殺すのかということ、胃の中で消化されないからです。

そういう原点のところを子ども達には知ってもらわないと「ビニール袋を捨てたらだめですよ」というだけではきちんと整理がつかないのです。地球を守っている、命を守っているという整理がつかないのです。これは今日本だけではなくてもう、大洋州、南米、どこへ行ってもプラスチックに対する理解が全然出来ていないのです。みんな同じ問題を抱えています。石油文明が生まれて、私たちはそれを受けて生活していますけれども、そのプラスばかり今まで享受してきて、マイナス面を教育の中で取り込んできませんでした。こういう自然の摂理の中に埋め込んで子ども達に教えていく必要があるのだらうと思っています。理科で習う生態系ピラミッドもほとんど大人になったらみんな忘れていきます。大学を出た人でもなかなか覚えてくれないようです。実はこの食物連鎖がやはり一番大きな環境教育を教えていく時の基盤になっていきます。このつながりが

きちんと理解できて役割を理解できていないと、環境問題の解決にきちんと方向性つけていけないのではないかと思います。

僕は環境教育を教えるときに二つの三角と教えています。3Rと書いてありますので皆さんお分かりだと思いますが、このリデュース、リユース、リサイクルというこの三角形です。何でリデュースが一番上で、三角形が逆なのかというのは海外の方々もご存じない方が結構います。ごみを減らすということ抜きに、リサイクル社会は当然進んでいかないわけです。リサイクルだけをやっていったってゴミは増えるわけです。ゴミは減らす、そしてリユース、使えるものはもう一回使う、どうしても燃やさざるを得ないようなもの、でも資源化できるものはリサイクルに回すのです。リサイクルは最後の選択なのです。リサイクルしないものは全部燃やすしかないわけですから、燃やすか、そうでなければ再資源化です。

今日本の環境教育の中で、この3Rの教育の中で一番揺れているのはそのあとの問題なのです。それは何かというと、リサイクルしたらもうその段階で自分はいいことした、環境派だと思ってしまうところなのです。例えばペットボトルを資源回収に出しました、紙はちゃんと分けて出しています。出した段階で市民は満足しているんです。ところが、産業廃棄物の処理業者や資源回収業者は困っているわけです。なぜかというとな資源を回収してもそれを商品にしてくれる企業が少ないからです。再資源の商品を作っても買ってくれる消費者が少ないからです。そうすると、資源を集めてもそれは回らないわけです。その資源を集めて再商品化して、それを売る。その売ったものを消費者が買う。ペットボトル10本出した人は、ペットボトル10本でできた商品を買うところで初めて循環の輪が回るわけです。経済が回るわけです。ここまでしないと自分が消費していることに対する責任はとれないと思います。ここまでをひっくるめて、3Rとグリーン購入合わせてリサイクルは回る、そういうことまでがちゃんと教えられているかどうか。これは学校で教えた場合は、ゴミ減量はゴミ減量、リサイクルはリサイクル、というふうにばらばらで教えています。行政もセクションが違っていたりすると、まったくつなげて考えてくれません。こういう環境教育の大事なポイントを子ども達には学んでもらいたいと思います。先生達にはそこをきちんと伝えてもらいたいと思います。それをしないと、本当の意味で意識の根底に落ちません。腑に落ちないということになります。こういうことをどういうふうにしてやっていこうかという、学校教育の現場や、地域の環境学習の活動の原点にもっていくところが大事なことになります。地球から超えて他の惑星にまでに行く力を持っている人間ですので、もうそろそろその技術をそういった地球の中の問題解決にあてていく必要があるのではないかと思います。特に今日の早朝にアメリカが大きく転換されましたので、環境政策がかなり前進すると思いますけれども、こういった世界の英知を追いかけなければいけない時代が来ています。

環境学習と中国の古いことわざ「不易流行」をつなげて考えてみました。持続可能な開発のための環境教育は、人権教育、開発教育、平和教育、環境教育などいろいろなものを統合して考えないといけないと言いつつも、環境教育をやっている人は、環境教育こそがすごく大事なことなのです。人権教育をやっている人は人権教育がすごく大事なのです。みんなそれぞれ自分のところが大事なのです。けれども、そういう考え方では社会に起こっている様々な経済的問題、社会的問題、環境問題は統合的に考えていくことができません。

「不易流行」というこの言葉の、「不易」は変わらないもの、「流行」は時代とともに変化するものです。環境というのは実は「流行」なのです。時代や技術の進化とともに問題は変わっていきます。どんどん変化します。時代とともに変化する環境問題と、これに対して学習する、学ぶというのは「不易」です。これは人間が地球上に命を持って社会にでてきて、今の現代にいたるまでずっと学び続けているのです。人間は学び続けないと生き残れなかったわけです。なぜかというとな自然界の中では弱者だからからです。

この学ぶというプロセスは人間が生きるというプロセスとイコールです。この学ぶプロセスを放棄すると、人間はもうどんどん減っていきます。生きていけなくなります。そういう原点である学ぶということは不変の活動という位置づけをすれば、環境問題であれ人権問題であれ平和問題であれ、過去や現在から学んで未来を作っていく、そういう基本的な筋が通るわけです。この学ぶという行為を「不易」の課題として、どう先生方



や地域の大人が子ども達に向けていくのか、また、自分達の生き方としてそれを提示していくのかということが必要になります。

## ■地球ウォッチングクラブ

環境問題は単純で自分ですということと、自分達が自分達の足で立っていく、この二つの自立がキーになってきます。西宮の「地球ウォッチングクラブ」という事業は、そういったことを背景とした活動なのです。小学生全員に「エコカード」というカードを配っています。幼稚園、保育所には「地球と仲良しカード」というのを配っています。中学生以上の市民は「エコアクションカード」というのを持っています。小学生が持っているこのエコカードというのは、毎年学校の先生を通じて子ども達の手にわたります。このカードで何をするかというと、学校の中で環境の学習をしたり、地域でリサイクルや資源回収をしたり、自然の中でハイキングをしたり、お店でリサイクルをしたり、ペットボトルを持って行ったり、地球にやさしい買い物したり、マイバッグを使ったり、そういうことをするとお店でスタンプがもらえます。それを今では西宮市の小学生29000人すべてが毎年それを行うようになっていきます。やるかやらないかは本人、または先生の一つの選択になりますけれども、そういう条件を毎年子ども達には与えています。今、市内のスーパーマーケット、文具店、子ども会、ボースカウト、ガールスカウト、議会、学校の先生には全員ハンコが預けられています。今1900個把握しています。子どもが活動するとどこでもハンコがもらえます。地域と学校と家庭、それぞれのジャンルでハンコを集めます。ステッカーが貼ってある所に行けば「エコスタンプ」がもらえるのです。それぞれにスタンプが10個集めれば「アースレンジャー」として認定されます。

これは何が大事かということ、エコレンジャーとして子ども達が認定されるということも大事なのですが、地域の大人達が子どもの環境学習を支援するというネットワークを作っていることがとても重要です。地域の大人は普段環境問題を考えて生きているわけではないのですが、子どもがエコカードを持ってきてくれたら、文具店のおじさんもエコ商品買ったらハンコ押してくれる、スーパーのレジの人も子どもがマイバックを使ったらハンコ押してくれる、ということで子ども達の意識の中に「気付き」を作っていきます。この気付きを学校と地域と家庭で結んでいく。それを地域社会全体で支えていくというところがこのエコカードのシステムの内容です。

子ども達に気付きを作っていくのは大人の一声です。その大人が一声かけることで子ども達は気付きをつないでいくことができます。地域も家庭も学校もみんなが環境のことでハンコを押してくれるということで、子どもの中には、自分の関わる社会全体が環境を大事にしているということを無意識のうちに感じていきます。そういう地域風土を作っていく、それを「頑張っているぞ」と言わなくてもできるような地域社会、こういうところまで作りあげていくことがこれからの環境教育では必要だと思います。このエコカードだけが全てではありません。これはあくまでシステムです。仕組みです。しかしこの仕組みがあることによっていろいろなチャンネルで活動、学習を深めていくことができます。

先ほどの企業が学校への支援をする、地域の人が子ども達に環境学習の支援をする、そういったこともこうしたシステムがあることによってそれがどんどん積み上げていきます。子ども達は一年生から六年生まで毎年カードをもらいますから、一年生ではやらなくても、三年生、四年生になったらやるかもしれません。学校の先生がやろうとやってやるかも知れないし、親がやろうとやってやるかも知れません。地域の中で盛り上がったなら地域でやるかも知れません。誰かがやろうと言ったらその段階から取り組んでいけるのです。そういうフレキシブルな、緩やかなシステムを作ることによって地域の中でそれが根付いていくのです。そういう実験しています。

今年で約11年になりました。企業からはやめたいという声は一つもありませんし、むしろスタンプを預かってくれる人が増えてきています。子ども達のアースレンジャーの数も去年、おととしと一割を超えまして、今は29000人のうちの約4000人がアースレンジャーになっています。目標達成する子ども達はそれだけいま



すけども、それ以外の子ども達もいます。そういう形で地域に新しい活動の仕組みを起こそう、そのことによって子どもがキーになって学校や企業や地域の単体、これをつないでいくということになります。

今は市内全域でこの仕組みをとっていますが、これを今度コミュニティ単位でもっと小分けして動いていくようにしようと思っています。なぜかという、子ども達の生活圏というのは、小学校区で狭い範囲であります。地域の大人の顔が見えて子どもを支援するという仕組みをきちんと作っていけば、地域の中で子どもの存在を大人がきちんと知ることができますし、子どもも地域と自分のつながりをもっと身近に感じることができます。

いま私たちの協会が全市事務局になってアースレンジャーの認定を行っておりますが、アースレンジャーの認定を行うところを、例えば、児童館であったり、PTA であったりとか、どんどん細分化していきます。そういうことでより身近な地域の中に子どもを支えていくネットワークを確立していくというのが、これから当面の目的です。中学生以上の大人にはこういうエコアクションカードがあります。毎年こういう環境パネル展というので子ども達が活動発表を行うチャンスを作っています、大人が子どもから学ぶというきっかけになります。特に年配の方々、地域の方々には小学生がどんなことを勉強しているかほとんど知りません。見に来て、先生と子ども達が作った壁新聞を見てびっくりしています。「子ども達はこれだけのことを学んでいるのか」「先生はここまで組織して、子ども達を上手く学ばせて、発表できるところまで持って行っている」と、先生に対する信頼、子ども達に対する大人の目が変わります。そういう仕掛けも、こういうことによってできてきています。海外からの作品も、大体毎年 20 カ国から 200 点くらいくるのですが、それを市民の方が英語を全部日本語に訳して海外の子ども達や大人の方々の活動も市民が学ぶ、そういう学び合いの世界がここにありません。

## ■小学校における学習支援

小学校の学習支援の中で、すごく大事だと思っている部分があります。一つは地域学習です。学校の先生、行政の職員、自分達が働いている職場の地域はどんな地域かほとんど知らないのです。知らないのに地域学習できるかと言ったらできないです。その地域の中にある自然、歴史、文化的要素、そういう様々な地域の資源を今私たちの方で整理して、小学校の環境教育担当の先生に、地図に落とししたものを渡しています。最終的にはインターネットから全部情報を取れるようにしようと思っています。これから若い先生がどんどん入って、自分が住んでなかったような地域の学校で地域学習をしていこうと思ったとき、ではどこに手掛かりがあるかという、古老とのつながりなどがなくなかなかできません。しかし、子ども達にとって大事なものは地域を知るという活動です。総合学習の事業は地域がなかったらできません。そういうことをサポートできる先生の資質があるかという自分で磨くしかないのです。でも地域のいろいろな情報を集めて、情報提供するところまでは NPO でもできるし、行政もできます。それをどう使うかは先生の力量にもよります。こういう材料がないとなかなかこれからの教育はできないと思います。

あとは、小学校であれば、年度ごとに一年生の先生から六年生の先生はカリキュラムを作って、子ども達にいろいろなこと提供します。年度が終わったら、一年生の取り組み、二年生の取り組みなど単年度の一年から六年までの取り組みが報告書で出てくるのです。ところが一番弱いのは一年生の子が六年生で卒業するまでの時間軸としての六年間です。この六年を誰が見ているのかというのが問題です。意外とこれを学校の中で誰も見ていないのです。では、誰が見ているかといったら親なのです。親はずっと子どもの成長とともに学校と関わりますから、親は見えています。では親にもっと教育現場に関心を持たせて、授業に参加できるときは一緒に授業に参加して、先生の代わりに教えたり、またはリーダーをしたり、いろいろな形で保護者を学校教育の中に入れながら、子どもの一年生から六年生で卒業するまでの時間軸としての六年間を、教師も保護者も意識できるようにしよう、ということで学習履歴ボックスを作りました。保護者や先生に情報公開をすとか、保護者に対する研修をやって授業に関われるようにすとかいうことを進めています。

それを体系化したのがこの図で、一年生が下で六年生が上なのですが、一、二年生であれば「家庭」、三、四年生は「地域」、五、六年生は「社会」という視野の広がり、それから「自然」、「暮らし」、「生き方」といった子ども達の内面的な広がりです。そういったことを、学校の既存のカリキュラムと環境への取り組みとを混ぜながら、それを総合的に進めていこうということで、これはもう実質六年間くらい小学校に関わってずっと作ってきた内容です。その時、この学校は人権教育の拠点校だったのですが、特に関西の場合は部落差別の問題あって非常に厳しいのです。人権教育拠点校があるのですが、人権教育をやっている先生は、「うちは人権教育の学校だから環境教育まではできない」ということを言い出します。今であれば人権教育をやっている学校で環境教育できていないのはおかしいのではないかと言えるのですが、当時は「人権教育が大事や」と言われたら他の事はぱっと無くなってしまっていました。環境をやっているところも「環境以外のことは耳かさない」といった具合です。けれども人権教育の核は命の問題、環境教育もやっぱり命の問題です。そういう社会の仕組みの中でどういう価値観が大事で、どういう生き方をしたいのかということを考えていたら当然全部オーバーラップしてくるわけです。そのオーバーラップしたところの核を先生が子ども達に学ばせるような仕組みを作らないと全部課題教育の課題をつまみ食いして教えたことにしかなりません。一番大事な生き方を伝えたことにはなりません。学ばせたことにはなりません。そういったことを、ここの学校でも同じように考えて、人権教育と環境教育のつながりをまず先生にほぐすところからやりました。

PTAの方々が子どもの学習のリーダーになったり、後ろで立って子どもと一緒に学ぶサポートを引き受けるように、私たちの協会がコーディネートしてやります。一緒に学んでもらうという体験を特に一年生、二年生は重視します。一年生でも例えば一学期、二学期、三学期と連続性のあるプログラムをやって、最後の三学期には保護者がリーダーになって子どもに教えられるような、そういうプログラムをやったり、一年生を二年生につないで行くという、年度を越えたつながりを意識していくとかです。

自然体験のときには保護者もできるだけ参加させます。保護者の世代がもう自然から離れた世代なのです。むしろ今、子ども達の方が身近に自然と関われる時代なのです。保護者の方々が子どものころは日本の川や海は汚れていました。「川へ行ったらいけない」「海へ行ったらいけない」と言われた時代に育っていますから、保護者の方が自然体験がないのです。保護者の方が自然体験がないのに、子どもにだけ自然体験を一生懸命させても、親が子どもの学んだことを否定することだってあるわけです。だから子どもと親と一緒に学んで、一緒に共感して、子どもの価値観を育ててやるということを親が意識しないと、なかなか学校の中で先生と子どもだけで培えるものではありません。保護者も関わっていただくようなことをやったり、できるだけこういった学びの場に保護者を呼んで一緒にプログラムをやるということを低学年のうちはやります。

総合が入ってきますとだんだんと関わる相手も変わってきます。そこに地域の人であったりとか、例えば地域の語り部ボランティアというボランティアの方々が、子どもの地域学習の時に講師をしたり、自然の現場へ行って体験するとか、あとお店もかなり学習のフィールドですから、お店を使わせていただくとか、福祉の学習と環境学習をつなげてもらうとか、二分の一成人式などをつなげていくとか、こういう様々な学年に応じたつながりを意識した授業構成を取っていきます。

この学校は中庭の芝生広場をつぶして田んぼにしました。農家の方に協力していただいて井戸を掘っていただいて、毎年五年生は田植えをしてお米を栽培します。これは街のど真ん中です。農家の方が機械を持ってきて、稲刈りを実際機械と手狩りと両方体験させていただいて、とれたお米と一緒に食事をしたりとか言うようなことまで付き合ってくださいました。街だからできないというのではなくて、芝生広場で芝生半分しか使っていないなら田んぼにしてもいいのではないかという発想で、田んぼを作ってやっています。

いま学校でよくビオトープがありますよね。僕は、ビオトープは確かに子ども達の自然体験を伸ばすのにはいいのですが、ビオトープを作りたいと思った先生がいる間は何とか持つのです。その先生がいなくなったら大体つぶれていきます。自然に関心のない先生もたくさんいるわけで、それを子ども達だけで維持できるかと言ったらなかなか維持できないのです。自然を放置した場合、なかなか自然が思い通りに行かないのと同じよ

うにビオトープも放置し過ぎたらなかなかそれは自然として活用できなくなります。むしろ人間が近付けなくなります。田んぼは日本の古来から、自然を守り、人間の命を守り、そして命の循環をずっと作ってきたフィールドです。水を張った瞬間にカエルが現れ、水生昆虫が出てきます。子ども達は、何もなかったところから生き物が集まってくる、そこにまず学びがあります。一年間終わって稲刈りをしたら、それは単なる土の状態になりますが、次の年にまた水を引くとまた生き物が現れるのです。そういうふうな人間の営みと自然の出会いというものをやるのであれば、田んぼというのは抜群だと思っています。こういう国際交流とつなげたり、六年生になると平和学習をやりますので、平和と自分達の生き方を考えてもらいます。また、企業との出会いで自分達の将来、企業の取り組み環境活動と同時に自分達が消費者として環境問題とどう関わるか考えてもらうというような授業を作っております。

## ■総合的な学習の時間と ESD

学校の先生達が、総合的な学習の時間でやっておられた時に一番の欠点は何かということ、一学期で環境やりました、二学期で福祉をやりました、三学期で国際やりましたと学期ごとに課題が並んでいるだけというのがあります。では一学期の環境、二学期の福祉、三学期の環境をつなげて何を先生が伝えたかったのか、子ども達はいったい何を学んだのかという、最後の落とし込みのところまでできている先生はすごく少ないのです。なぜなら先生達のイメージの中でつながっていないからです。課題学習は簡単なのです。課題はいっぱいありますから。再分化して教えたらいのです。しかし、教えることと、子ども達の中での軸になる部分を学ぶということは全く別なのです。それを先生が必ずしもできていません。逆に僕らが入って行ってそれをつないであげることできます。こういう考え方が ESD という考え方です。それは必ずしも ESD を教えるのではなくて、学んだことをつないでいくような手法であったり、それを現場で子ども達に気付かせていくようなとっかかりを作っておける、そういったところから子ども達の中に軸が芽生えていくことがあります。そういったことも事業連携でできます。

中学校でも環境劇を作ろうといった先生の提案を受けて子ども達にいろいろなものを考えさせるわけですが、その時に温暖化問題であれば、例えばエネルギーを供給している電力会社やガス会社、家電のメーカーさんだったり、電気工事の方、行政であったり、自然エネルギーをやっているところであったり、クーラーとかそういうものを作っているダイキンさんみたいな企業であったり、あと、地域のコミュニティであったり、いろいろな人達がいろいろな角度から、エネルギーの供給、温暖化対策、生活、いろいろなチャンネルからいろいろな情報を子ども達に与えます。子ども達は与えられた情報をグループで討議します。他の人が学んできたものを学び直します。もう一度全体をシャッフルした中から、自分達はなにが大事なのか、何を環境劇にまとめたいのか、という考えるプロセスがとても大事です。学んだことを発表するだけでは意味がないのです。この考えていくプロセスのところには私たちはどういうふうに支援できるかというのが、企業、市民、NPO、行政が学びを支援する意味なのです。ただし、このことを先生が理解してないとなかなかつながらないのです。こういう先生の素養は、ことを教える、子ども達に体験をさせるではなくて、それを通じて学びや気づきを子ども達の中に起こさせるのか、そのテクニックが先生達に求められているのです。それは自分一人ではできないので、やはりいろいろなチャンネルを持たないとこれはできません。その時にどうしてもやはり先生だけでもできないので、私たちのような NPO がコーディネータ役になって地域と先生をつないだり、企業とつないだり、ということをしませんが、日本では残念ながらここにお金が落ちないのです。だから一生懸命動けば動くほど、私たちの NPO は赤字になる運命なのです。けれども、多少は教育行政などが負担してくれますが、つなぎ手を保証する社会にならないと、多様な主体、多様なステークホルダーが地域を支えていくということはまだまだ難しい状況です。その辺の役割分担がこれから必要になるかと思えます。

ESD を考えていくために、ESD とは何かということをお話するのはではなくて、ESD という持続可能な開発

のための教育にとって何が必要なのかという情報提供をここでしています。そのためには地域をつなぐという地域の具体的な情報、世界をつなぐ、世界で起きていること、それから時代をつなぐ、これは歴史です。主体をつなぐ、いろんなステークホルダー、それから課題、こういったものをどこからでも検索できるようになっています。そういう地域社会全体出で起きていることを一人一人の市民がどれだけ自分のこととして理解して、次のあるべき社会のイメージを自分が持てるのか、こういったことを進めていくのが ESD だと思っております。ESD はこれですよと言ったところで絶対共通の認識は取れないと思います。ですからそれは一人一人の中に温めていくものですし、これから作り続けていくものですから、そういうものをトレーニングしていくチャンスが必要なのです。これは西宮でいうとエコカードであったり学校でのいろんな出会いであったり、そういうものになっていきます。

## ■エココミュニティと地域活動

そういったことを、一人一人の努力だけでやっけてはだめで、地域に伝えていく必要があります。西宮市は、環境学習都市宣言というのを 2003 年に行いまして、「学び合う社会づくり」というのを大きなキーワードにしています。先ほどの「不易流行」の「不易」に当たる学び、これを社会のキーワードにして地域づくりをしていこうというのが特徴です。いろいろなジャンルの方に関わっていただいて、市の環境計画全体を今推進しています。特に大事なのがエココミュニティという考え方で、コミュニティ単位で多様な主体が集まって地域のことを考えていきます。今まで環境のことを考えるのは環境の協議会というのが地域の中に定着しています。でも自治会も福祉協議会も PTA も青少年愛護の団体も子ども会も企業もみんなが地域のことを考えなくてはなりません。みんなで地域のことを、子どもから年寄りまでも全部ひっくるめて考えていくために、どういう組織を作ったらいいかということで、いま地域の実情に合わせて、行政と私たちで今コミュニティづくりをずっと進めています。ですから地域ごとに全部取り組みが違います。マイバックをキーにしてうまく動く地域、ここはスーパーマーケットの店長さんにも全部協力してもらって、回覧版で地域にマイバックの呼びかけをずっとして、マイバックの持参率を上げていくということを二年間続けてやってきました。あと、地域の歴史を過去から学んで、今の自分達の地域を知って、これからどうしていこうかということを考えていこうという地域、それから中学生をもっと巻き込んでいこうという地域、ゴミの減量をテーマにしながらやっけていこうという地域、このゴミ減量についてはこのスケールパッカー車がありますが、あれ重さが測ることができるパッカー車です。ですから、ごみステーションごとに重さを全部はかってくれるのです。1100 所帯でステーション 110 のところ、この一年間かけてずっとゴミの量を測ってもらいました。そうすると、地域住民の数で割ったら一人あたりの一日に出すごみの量がでます。そのひとり一日に出すごみの量を、努力しないでやった時、努力したらどうなるかということ、住民に提示して、HP で全部それが見られるようにしています。ゴミの状態を写真にとって見られるようにしています。ゴミが見えるようにして、企業と私たちと行政でゴミを減らす努力をこの間しました。そうすると 11%ごみが減りました。おととしは 4%です。ゴミを今回は何キロ何キロというのをステーション全部にボードを作って書いていきました。インターネットでもみれるようにしました。そのことでとても効果が生まれました。この地域は街中なので、子ども達が自然遊びをしない。親は、公園で遊んでいる姿見た時に、せっかく公園で遊んでいるのにテレビゲームをしていると。なんとかしたいというので、自然体験を子ども達にさせることを地域の課題にしよう、という事でずっと取り組みを続けてきました。

後は電力消費を、今年この地域では関西電力と一緒にあって 160 世帯、小学校の家庭を中心に 160 世帯の電気使用量を全部調べさせてもらって、努力をしたらどのくらい減るかということ、数字で見られるようにしました。そうすると、昨年比で 1 割減らすことができました。具体的な数字を出していこうとすると企業の協力が必要になります。そういう形で、環境学習を環境保全の活動に発展させていくということが具体的に出てきたかなと思います。そういうことを、情報提供として HP でずっと見せたり、小学生が取り組んだエコ活動

のポイントとか、市民の活動のポイントとかを全部今、累積させてHPで見えるようにしてあります。どんなテーマごとに、市民がどれだけ活動したかということが全部数字で出てきます。どのコミュニティでどれだけやったか全部出てきます。

そういう一人一人のエコ活動を、今まではアスレンジャーの認定書とか、大人の場合やったら頑張ってスタンプ集めたりしたら、間伐材の筆箱がもらえたりとか、個人還元またはグループ還元やったんですけども、今度はそのポイントを、地域のエココミュニティ会議があるところに、今度是我们の協会が企業の協賛をもらってファンドを作って、そのファンドで、地域のコミュニティのポイントを買います。10000ポイントの、小学生から大人までの活動があったら1ポイント10円で買ってでたら、10万円が渡されます。その10万円でもたそのコミュニティの活動やっただけなんです。そういう形で、実際のお金を地域の保全活動につなげていく、そのベースはどこかと言うと、一人一人のエコ活動。そういう活動を、地域にもう一度社会化していく、社会還元させていくという発想がないといけないです。全部個人努力で終わってしまう。そうするとだんだんだんだん気持ちが萎えていってつぶれていってしまいます。自分のやったことでも、それが地域社会に帰っていく、という仕組みを作っていくことが、大事ではないかと思っております。

こういうことで、わたし達の地域の活動があります。今日皆さんもごみの問題とか、自然観察の活動とか、いろんな活動をされてますが、最初の取っ掛かりはいろいろなところから始まってくると思います。けれども最終的に大事になってきますのは、冒頭言いましたとおり、社会を変えていく、という。これは教育の立場、行政の立場、地域の立場、企業の立場いろいろな立場があります。共通の課題です。そういうところに視線が向けられるような環境学習事業、学芸大学から発信していただければと思いますので、よろしく願いいたします。どうもありがとうございました。

司会：

ありがとうございました。

環境学習の生きた取り組みとして大変参考になったと思います。せっかくですので、時間は押しておりますけれども、質問などありますでしょうか。ぜひ挙手をお願いいたします。

樋口：

どうもありがとうございました。

おそらく今小川さんが話されたことは、ものすごくこれからの自治体や、自治体だけでなく地域でのいろいろな環境学習活動での重要な示唆が含まれていたと思います。

一つお伺いしたいのは、仕組みを作っていく、おそらくあれは10年間とか長い期間をかけて、結果的にこうなったと言うことなのかもしれないんですが、仕組みを作る時に何がポイントになったのか、要するにいろいろな企業の方もいらっしゃる、いろいろな店舗の方もいらっしゃる。そういう人達もひっくるめて、一緒に主体と主体をつないでいくというとき、どういうところが一番ポイントだったのかなと言うところをお願いいたします。

小川氏：

基本的にはですね、誰かが頑張らなくては回らない活動ではダメだと思ったのです。いろんなベクトルから力が働けば、事は進んでいく。そういう「主役のない仕組み」でした。それは、子どもが主役と言えば主役ですけど、実は子どもではなくて地域の大人が主役かもしれません。けれども、ちょっとつけばそのままずっと転がり続けていくような活動をイメージしたのです。10年かけてあの仕組みができたのではなくて、10年前に、動いた時にはあの仕組みはありました。あの仕組みがないとあれは回らないのです。そこからだんだん

まず持続させる、ということに意味があります。

あと、新しく入れ替わっていく人達に対する意識啓発も必要となってきます。そういうのは、年次を超えてやっていく必要があるのです。あの仕組みの根本のところは、もう当初全部設計されていますので、そういう制度設計をきちんとできて、動かしていくというところがないと全市の活動というのはなかなかできないのです。私たちは今現在 48 万、当時で 42 万の都市ですので、40 万都市で地域社会全体を本当に動かせるかどうかというのはものすごい冒険だったと思います。ただしこれは、最初から完璧に、100%の小学生が活動するということは考えておりません。むしろ、一割から二割の子ども達がアースレンジャーになっていくけれども、それを支える地域の仕組みは崩れないと言うことを 10 年、20 年で続けていけば、その社会の意識は変わっていくと思います。アルバイトに来ている 19 歳の学生がおりますが、彼女は小学校の時にエコカードを持って活動していた子です。そろそろ教員にもなっていく時代がきます。その学校の先生になった子ども達に、「自分達も小学校の頃エコカードもって活動してたんやで」ということがあれば当然、子ども達に影響力が出てきます。ここでもう一巡に入ってきましたので、またステージが変わるといふふうに思っています。

司会：

ほかにございませんでしょうか？

そうしましたら、小川さんの発表は終わらせていただきます。ありがとうございました。